The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宮津市方言における待遇表現の使い分け ： 属性と地域差に注目して
Author(s)	張, 允娥
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2016, 14, p. 36-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55614
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 14 号（2016 年 3 月）36-52

宮津市方言における待遇表現の使い分け

―属性と地域差に注目して―

張　允娥

【キーワード】宮津市方言、使い分け、類義語、待遇表現形式、尊敬語

【要旨】

本稿は、2014 年と 2015 年に京都府宮津市で行った待遇を表す類義語と待遇表現形式と尊敬語「（ラ）レル」と「ナル」の使い分けの調査結果を報告するものである。調査結果は次のようにまとめられる。

（A）「ドコ」と「ドチラ」の使い分けは女性の話者に多く見られる。「ドチラ」の運用には一次的に＜ウチ/ソト＞が関連しており、二次的には＜上/下＞が関わっている。

（B）待遇表現形式の使い分けには、＜上/同/下＞が最も多きく関与しているが、対者が＜上/同＞である場合、一次的には＜ウチ/ソト＞が関わっており、＜同＞である場合、二次的に＜性別＞が関わっている。

（C）対者が＜下＞である場合は、＜性別＞あるいは＜ウチ/ソト＞による使い分けが見られ、＜性別＞による使い分けは男性の話者に限られる。

（D）「（ラ）レル」は丁寧語との結びつきが強く、宮津地区で多く観察される。一方、「ナル」は丁寧語との結びつきが弱く、日置地区で多く用いられる。

（E）「（ラ）レル」と「ナル」の使い分けには、＜上/下＞が関連している可能性が高く、「（ラ）レル」は、＜ウチ・同＞の人物には用いられない。一方、「ナル」は＜ウチ・同＞の人物にも使用されており、「ナル」の使用不使用による使い分けがあると考えられる。

1.　はじめに

本稿では、2014 年と 2015 年に京都府宮津市の宮津地区と日置地区で行った待遇表現の使い分けの調査結果を報告するものである。調査では、類義語、待遇表現形式、尊敬語の運用において、話者と対者の属性がことばの使い分けにどのように関連しているかを調べることを目的とした。具体的には、待遇を表す「ドコ」と「ドチラ」の使い分け、「来たのか」、「行くのか」、「いるか」における待遇表現形式の使い分けに加え、尊敬語「（ラ）レル」と「ナル」の使い分けの調査を行った。同様の場面を設定して対者の属性のみを変える方法で調査を行うことで、話者と対者の属性のうちどのような要因が宮津市方言における類義語、待遇表現形式、尊敬語の使い分けに大きく関わっているのかを把握することを目指した。また、奥村（1962）によると宮津地区と日置地区は異なる方言区画に属するが、両地区で用いられる待遇表現の使用に地域差があるかどうかを確認することを目的とした。

以下の 2 節では、宮津のことばの使い分けに関する研究に触れたのち、調査目的について述べる。3 節で調査の概要について述べ、4 節で調査結果について述べる。5 節は調査結

果のまとめである。

2. 先行研究

宮津におけることばの使い分けを分析した研究には、国立国語研究所（1990）がある。国立国語研究所（1990）では、量的な分析を行った結果、類義語や待遇表現の運用において話者と対者の属性が大きく関わっていることが指摘されている。国立国語研究所（1990）によると、「ドコ」と「ドチラ」の運用には、対者の年齢が最も関連しており、二次的には性差がかかわっている。また、待遇表現形式の場合、「尊敬語＋丁寧語」の使用は、対者の年齢としては、年下、同年、年上の順で多く、同性より異性に対しての使用が多いことが指摘されている。話者の属性と関連して、全体的に男性に比べ、女性の方は尊敬語と丁寧語を用いて対者を待遇することが多いのに対し、女性に比べ、男性の方は尊敬語と丁寧語なしの形式を用いることが多いことが報告されている。

以上のように、国立国語研究所（1990）の研究では、ことばと話者の属性、対者の属性の相関を量的に分析しているが、それぞれの調査項目における対者人物の設定が異なっており、地域内の親しい人物と親しくない人物を設定しているため、地域外の初対面の人物と地域内の知り合いの人物によることばの使い分けはまだ明らかにされていない。特に、宮津市で用いられている尊敬語「（ラ）レル」と「ナル」の使い分けに話者と対者の属性がどのように関連しているかは分析されておらず、異なる方言区画に属する宮津地区と日置地区に見られる特徴はまだ明らかではないことから、2014 年度と 2015 年度の調査では、類義語、待遇表現形式、尊敬語「（ラ）レル」と「ナル」の使い分けに話者と対者の属性がどのように関わっているのかという観点から調査を行い、それぞれのインフォーマントに焦点を当て、次の 2 点を分析した。

- 類義語、待遇表現形式、尊敬語 の使い分けに話者と対者の属性のうち何が最も関わっているのか。
- 宮津地区と日置地区における類義語、待遇表現形式、尊敬語の使い分けに地域差があるかどうか。

ここで、調査結果を先に述べると、類義語の使い分けにおいては、話者の性別と対者の属性が関わっており、待遇表現形式の使い分けには、主に対者の属性が関与していることが明らかになった。一方、尊敬語「（ラ）レル」と「ナル」の使用には地域差が見られた。

以下の 3 節では、調査の概要について述べ、4 節では、話者と対者の属性による使い分けが見られた類義語と待遇表現形式の使い分けについて述べた後、地域差が観察された「（ラ）レル」と「ナル」を分析した結果について述べる。

3. 調査概要

本節では、調査の概要について述べる。まず、3.1 節ではインフォーマント情報について述べ、3.2 節では調査文について述べる。

3.1.　インフォーマント情報

調査は、2014 年と 2015 年に行った。インフォーマントと調査情報は、表 1 のとおりである。

表１　インフォーマント情報

ID	地区	年齢	性別	外住歴	調査日
MCF	宮津	82	女性	なし	20140904
MGF	宮津	74	女性	なし	20140904
MEM	宮津	79	男性	なし	20150902
MIM	宮津	79	男性	なし	20140903
MFM	宮津	74	男性	42 - 45:福井県小浜市、45 - 51：京都府亀岡市	20140903
HGF	日置	84	女性	なし	20150903
HHF	日置	80	女性	なし	20150903
HIF	日置	79	女性	なし	20150903
HJF	日置	73	女性	18 - 21：京都市	20150903
HCM	日置	84	男性	23 - 48：宮津市(宮津地区)	20150903
HEM	日置	74	男性	なし	20150903
HFM	日置	71	男性	18 - 19：京都府綾部市	20150903

3.2.　調査方法

本調査では、類義語、待遇表現形式、尊敬語「(ラ) レル」と「ナル」の運用において話者と対者の属性がことばの使い分けにどのように関連しているかを明らかにするため、調査票を用いて面接調査を行った。調査票は、国立国語研究所（1990）の調査結果でことばの使い分けが見られた項目「どこから来たのか」と「どこへ行くのか」に加え、「明日も宮津にいるか」を調査項目として設定した。

（A）「どこから来たのか」

（B）「どこへ行くのか」

（C）「明日も宮津にいるか」

以上のように、国立国語研究所（1990）を参考に調査項目を設定したが、対者人物の設定においては修正を行った。国立国語研究所（1990）の調査では、＜上/同/下＞、＜男女＞、＜親疎関係＞をもとに対者人物を設定しているが、それぞれの調査項目によって対者の人物設定に相違点があり、「どこから来たのか」の項目においては、＜疎＞の人物のみを設定しており、「どこへ行くのか」の項目において、＜疎＞の人物は「あまり親しくない年上の異性」のみを設定している。このように、質問ごとに人物の設定に差が見られるが、特に知り合いではない人物に対することばの使い分けは調査されておらず、宮津市の話者が他地域からの人物にはどのようにことばを使い分けているかは分析されていない。

そこで、本調査では、他の地域からの人物に対することばの使い分けに話者と対者の属性がどのように関連しているか、待遇を表すことの使用に地域差はあるのかを調査するため、三つの調査項目における対者人物を統一させ、「他地域からの観光客」という地域外の初対面の人物（以下、ソト）と「近所の知り合い」という地域内の初対面ではない人物（以下、ウチ）に設定し、それぞれを「年上の女性、年上の男性」「同年の女性、同年の男性」

「年下の女性、年下の男性」にどのように言うかを調査した。具体的な対者設定は次のとおりである。

表 2　対者設定

観光客の年上の女性	知り合いの年上の女性
観光客の年上の男性	知り合いの年上の男性
観光客の同年の女性	知り合いの同年の女性
観光客の同年の男性	知り合いの同年の男性
観光客の年下の女性	知り合いの同年の女性
観光客の年下の男性	知り合いの年下の男性

それぞれの項目と人物における場面設定は、次のようである。調査の際には、対者の属性のカードをトランプのように並べ、質問ごとに調査文の空欄［　］に対者人物を変えながら質問を行った。

【ソトの人物：観光客】

（A）**どこから来たのか**

「あなたが道を散歩していたところ偶然観光客と話すことになったとします。相手の人があなたより［　　］の場合、その人に「どこから来たのか」と尋ねるとしたらどう言いますか」

（B）**どこへ行くのか**

「では、その人に今から「どこへ行くのか」と尋ねるとしたらどう言いますか。」

（C）**明日も宮津にいるか**

「では、その人に「あしたも宮津にいるか」と尋ねるとしたらどう言いますか」

【ウチの人物：知り合い】

（A）**どこから来たのか**

「あなたが道を散歩していたところ偶然知り合いに会いました。その知り合いがあなたより［　　］の場合、その人に「どこから来たのか」と尋ねるとしたらどう言いますか」（知り合いが予想外の場所から突然現れて、声をかけられたとする場面）

（B）**どこへ行くのか**

「では、その人に今から「どこへ行くのか」と尋ねるとしたらどう言いますか。」

（C）**明日も宮津にいるか**

「では、その人がお祭りで受付の役をしているとします。その知り合いに渡す物があるから、しばらく「ここにいるか」と尋ねるとしたらどう言いますか？」

4.　調査結果

ここでは、調査結果をみていく。まず、4.1 節では、調査項目（A）と（B）における「ド

コ」と「ドチラ」の使い分けについて述べる。4.2 節では、調査項目の述語に焦点を当て、待遇表現形式の使い分けについて述べ、4.3 節では 地域差が見られた「(ラ) レル」と「ナル」の使い分けに注目して分析した結果について述べる。

4.1.　類義語の使い分け

「(A) どこから来たのか」と「(B) どこへ行くのか」における「どこ」に使用された語形には、「ドコ」と「ドチラ」がある。国立国語研究所（1990）の調査では、「ドチラ」の運用には、対者の年齢が最も関連しており、異性に対する使用が顕著であるという結果が得られている。しかし、本調査では、「ドコ」と「ドチラ」の使い分けには、対者の性別による使い分けは観察されず、話者の性別による差が見られ、女性の話者は「ドコ」と「ドチラ」を使い分けている傾向が見られた。性差という観点からインフォーマントの性別に分け、結果を示すと表 3 のようになる。表 3 は、左からインフォーマントを女性、男性の順で地区別に並べ、質問ごとに、対者人物を上から下に並べたものである。

表 3　「ドコ」と「ドチラ」[1)]。

インフォーマントID		女性						男性					
		MGF	MCF	HHF	HJF	HGF	HIF	MFM	MIM	MBM	HCM	HBM	HFM
(A)	ソト・上・女	□	■	□	□	–	□	□	□	□	□	□	□
	ソト・上・男	■	□	■	□	–	□	□	□	□	□	□	■
	ソト・同・女	■	□	■	□	–	□	□	–	□	□	□	□
	ソト・同・男	□	■	■	□	–	□	□	–	□	–	□	□
	ソト・下・女	■	□	■	□	–	□	□	□	□	–	□	□
	ソト・下・男	□	□	■	□	–	□	□	□	□	–	□	□
(B)	ソト・上・女	■	□	■	□	–	□	□	□	□	□	□	□
	ソト・上・男	□	□	■	□	–	□	□	□	□	□	□	□
	ソト・同・女	■	□	■	□	–	□	□	–	□	□	□	□
	ソト・同・男	■	■	■	□	–	□	□	–	□	–	□	□
	ソト・下・女	■	□	■	□	–	□	□	□	□	–	□	□
	ソト・下・男	■	□	□	□	–	□	□	□	□	–	□	□
(A)	ウチ・上・女	□	□	□	□	□	□	□	–	□	□	□	□
	ウチ・上・男	■	□	■	□	□	□	□	–	□	–	□	□
	ウチ・同・女	□	□	×	□	□	□	□	–	–	–	□	□
	ウチ・同・男	□	□	×	□	□	□	□	–	×	–	□	□
	ウチ・下・女	□	□	×	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	ウチ・下・男	□	□	×	□	□	□	□	□	□	–	□	□
(B)	ウチ・上・女	□	■	□	□	□	□	□	–	□	□	□	□
	ウチ・上・男	■	□	□	□	□	□	□	–	□	–	□	□
	ウチ・同・女	□	□	×	□	□	□	□	–	–	–	□	□
	ウチ・同・男	□	□	×	□	□	□	□	–	□	–	□	□
	ウチ・下・女	□	□	×	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	ウチ・下・男	□	□	×	□	□	□	□	□	□	–	□	×

□：ドコ、■：ドチラ、×：意図どおりの回答が得られなかった項目、－未調査

表 3 で分かるように、「ドコ」と「ドチラ」を両方用いているインフォーマントは、MGF、MCF、HHF、HFM である。その内 3 人が女性であり、「ドチラ」の使用が見られた 1 人の男性のインフォーマントの場合、＜ソト・上・男＞に対してのみその使用が観察されている。「ドコ」と「ドチラ」の使い分けが見られた女性の話者が具体的にどのような人物に対

1）表の凡例「×」: 意図どおりの回答が得られなかった項目とは、本稿で取り上げる形式が回答されず、別の形式の回答が得られたものである。

して「ドチラ」を用いられているのかを見てみると、インフォーマントと質問項目によって異なった回答が得られているが、質問項目に関係なく、MGF の場合＜ソト・同/下・女＞と＜ウチ・上・男＞に、MCF の場合＜ソト・同・男＞に対して「ドチラ」の回答が得られている。一方、HHF と HFM の場合、質問項目によって回答に相違が見られる。まず、HHF の場合、ほぼすべての＜ソト＞の人物に対して「ドチラ」の使用が見られており、＜ウチ＞の場合、未調査の項目もあるため断言はできないが、＜ウチ・上＞の人物には「ドチラ」の使用は見られない。

このように、「ドコ」と「ドチラ」の使い分けには個人差があるものの両形式を用いた MGF、MCF、HHF、HFM の回答を見てみると「ドチラ」の使用は、＜ソト＞の人物に偏っていることが分かる。使い分けが見られなかった HGF、MIM、MEM、HCM の場合、未調査の項目もあるため確実ではないが、「ドチラ」の使用が偏っている＜ソト・上、同＞の人物に一回もその使用が見られないことから、すべての＜ソト＞人物に対する調査ができなかった HGF を除いては、「ドチラ」の使用は認められないと考えることができる。このように、インフォーマントと質問項目によって相違点はあるものの、上述したことをまとめると次のようである。

A)「ドコ」と「ドチラ」の使い分けは、女性のインフォーマントに多く見られ、女性は 6 人の内 3 人が両語形を用いているのに対し、男性は 6 人の内 1 人しか両方の語形を用いておらず、その使用も 1 回に限られている。

B)「ドチラ」の使用は、対者の年齢や性別に関係なく、＜ソト＞の人物に偏っており、＜ウチ＞の場合、＜上＞の人物に限って用いられる。

以上のように、「ドコ」と「ドチラ」を使い分けには、話者の性別による差が見られる。また、個人差はあるものの、「ドチラ」の運用には、一次的に＜ウチ/ソト＞が最も関連しており、＜ウチ＞の場合＜上＞の人物にその使用が限られていることから、二次的には＜上/下＞という要因が関わっていると言える。このような結果から「ドチラ」は心理的に遠い人物である＜ソト＞の人物と＜上＞の人物を待遇する際に用いられると考えられる。

4.2.　待遇表現形式の使い分け

次に、調査文の「来たのか」、「行くのか」、「いるか」に注目してそれぞれの部分にどのような待遇表現形式が回答されたかについて述べる。それぞれの項目においてさまざまな表現形式が見られたが、国立国語研究所（1990）では、待遇表現形式を「3. 尊敬語＋丁寧語」、「2. 尊敬語のみ」、「1. 丁寧語」、「0. 尊敬語・丁寧語なし」に分類し、敬語上の段階づけを行っている。待遇表現形式の敬語上の段階は、表現要素を重視したものであり、敬語上の段階が最も高い形式である尊敬語と丁寧語が結びついた「3. 尊敬語＋丁寧語」から尊敬語と丁寧語の形式が見られない敬語上の段階が最も低い「0. 尊敬語・丁寧語なし」までの段階づけになっている。本稿では、＜ウチ/ソト＞、＜年齢＞、＜性別＞という要因が対者待遇にどのように関わっているかを確認するため、回答された表現形式を個別的に取り上げるよりは国立国語研究所（1990）を参考に表現形式の段階づけを行った。それぞれの質問項目において用いられた表現形式と敬語上の段階づけは次のようである。

(A)「どこから来たのか」における「来たのか」に使用された表現形式と敬語上の段階づけは、以下の通りである。

3. 尊敬語＋丁寧語 :「ミエマシタ」「キナッタンデス」「コラレマシタ」
2. 尊敬語のみ :「ミエタ」「キナッタ」「コラレタ」
1. 丁寧語のみ :「キタンデス」「キマシタ」
0. 尊敬語・丁寧語なし :「キタ」

(B)「どこへ行くのか」における「行くのか」に使用された表現形式と敬語上の段階づけは、以下の通りである。

3. 尊敬語＋丁寧語 :　「イキナルンデス」「イカレマス」
2. 尊敬語のみ :　「イキナル」「イカレル」
1. 丁寧語のみ :「イキマス」
0. 尊敬語・丁寧語なし :「イク」

(C)「明日も宮津にいるか」における「いるか」に使用された表現形式と敬語上の段階づけは、以下の通りである。

3. 尊敬語＋丁寧語 :「オイデルンデス」「オンナリマス」「オラレマス」
2. 尊敬語のみ:「オイデルン」「オンナルン」「オラレル」
1. 丁寧語のみ :「イマス」
0. 尊敬語・丁寧語なし :「イル」「オル」

次に、どのような対者人物に対して敬語上の段階が高い形式が多く用いられているのかを見てみよう。まず、 宮津地区と日置地区の順で、敬語上の段階が高い形式を多く回答したインフォーマントを左から並べ、それぞれの質問項目ごとに、敬語上の段階が高い形式が多く回答された対者人物を上から並べて調査結果をまとめて示すと、次の表 4 のようになる。

表 4　待遇表現形式の運用

		宮津地区					日置地区						
		MFM	MCF	MGF	MIM	MEM	HEM	HCM	HHF	HIF	HJF	HGF	HFM
ア	A.ソト・上・女	●	●	●	●	●	●	●	●	▲	▲	–	△
	A.ソト・上・男	●	●	●	●	●	●	●	●	▲	▲	–	△
	B.ソト・上・女	●	●	●	●	●	●	●	×	▲	▲	–	△
	B.ソト・上・男	●	●	▲	●	●	●	●	×	▲	▲	–	△
	A.ソト・同・女	●	●	●	-	▲	●	●	●	▲	▲	–	△
	C.ソト・上・男	●	●	▲	●	●	●	●	–	×	▲	–	△
	A.ソト・同・男	●	●	●	-	●	●	–	×	▲	▲	–	△
	B.ソト・同・女	●	●	▲	-	▲	●	▲	×	●	▲	–	△
	C.ソト・上・女	●	●	▲	●	×	●	▲	–	▲	▲	–	△
	B.ソト・同・男	●	●	●	-	▲	●	–	×	▲	▲	–	△
	C.ソト・同・女	●	●	●	-	▲	●	▲	–	×	▲	–	△
	B.ウチ・上・男	●	●	●	-	▲	●	–	×	○	▲	▲	○
	C.ソト・同・男	●	●	●	-	▲	●	–	–	×	▲	–	△
	C.ウチ・上・男	●	×	▲	-	▲	●	–	●	○	▲	▲	△
	C.ウチ・上・女	▲	●	▲	-	▲	●	▲	▲	○	▲	▲	△
	A.ウチ・上・女	▲	●	○	-	▲	●	▲	▲	×	×	▲	○
	A.ウチ・上・男	▲	●	●	-	▲	△	–	×	×	▲	▲	○
イ	B.ソト・下・女	●	○	▲	●	▲	○	–	×	○	▲	–	△
	C.ウチ・下・女	●	○	○	●	○	△	○	○	○	▲	▲	○
	C.ソト・下・女	●	○	○	●	▲	○	–	×	○	▲	–	△
	B.ウチ・下・女	●	○	▲	●	○	○	○	○	○	▲	○	○
	A.ソト・下・女	▲	▲	●	▲	▲	▲	–	×	▲	▲	–	△
	A.ソト・下・男	○	○	▲	▲	▲	▲	–	●	▲	▲	–	○
	A.ウチ・下・女	●	○	○	▲	○	△	○	×	▲	▲	○	○
	B.ウチ・上・女	○	×	○	-	○	●	▲	○	○	▲	○	○
	B.ウチ・同・男	○	○	○	-	○	●	–	○	○	▲	○	○
	C.ソト・下・男	○	○	○	●	▲	○	–	×	○	×	–	○
	B.ウチ・同・女	○	○	○	-	–	●	–	○	○	○	○	○
ウ	B.ソト・下・男	○	○	▲	▲	▲	○	–	×	○	▲	–	○
	A.ウチ・下・男	▲	○	○	○	○	△	–	×	▲	▲	×	○
	C.ウチ・下・男	○	○	○	▲	○	△	–	○	○	▲	▲	○
	B.ウチ・下・男	○	○	▲	○	○	○	–	○	○	▲	▲	○
	C.ウチ・同・男	○	○	○	-	○	△	–	○	○	▲	▲	○
	C.ウチ・同・女	○	○	○	-	○	△	–	○	○	○	▲	△
	A.ウチ・同・男	○	○	○	-	×	△	–	×	×	▲	○	○
	A.ウチ・同・女	○	○	○	-	–	△	–	×	×	○	○	○

●：尊敬語＋丁寧語、▲：尊敬語のみ、△：丁寧語のみ、○:尊敬語・丁寧語なし、
×：意図どおりの回答が得られなかった項目、－未調査

表 4 のア、イ、ウは、調査結果を言及しやすくするために筆者が付けたものであるが、アは、敬語上の段階 3. と 2. が有効回答の 50%以上を占めている部分であり、イは 50%以下である部分である。ウは、3. の回答が得られていない部分である。表 4 から、宮津市方言における待遇表現形式の使い分けには、以下のような特徴があることが確認できる。

a)「3. 尊敬語＋丁寧語」の使用は宮津地区のインフォーマントに偏っており、「2. 尊敬語のみ」の使用は日置地区のインフォーマントに偏っている。

b)「3. 尊敬語＋丁寧語」と「2. 尊敬語のみ」の形式は、話者と対者の性別に関係なく、＜ソト・上/同＞と＜ウチ・上＞に使用が偏っている（表 3 のア）。

c)「3. 尊敬語＋丁寧語」、「2. 尊敬語のみ」、「1. 丁寧語」、「0. 尊敬語・丁寧語なし」の形式の使用に個人差が大きく見られるのは、対者がウチ、ソト関係なく＜下・女＞と、＜ソト・下・男＞に偏っている（表 3 のイ）。

d)「3. 尊敬語＋丁寧語」の使用が見られず、「0. 尊敬語・丁寧語なし」の形式は、＜ウチ・下・男＞と＜ウチ・同・男女＞に使用が偏っている（表 3 のウ）。

以上のような結果から、どのような形式を用いるかには、対者との関係＜ウチ/ソト＞や年齢、性別、そして地区も関連しているように思われる。宮津地区の場合、インフォーマントの全員から「3. 尊敬語＋丁寧語」の形式が回答されているが、日置地区の場合、「2. 尊敬語のみ」の形式が多く回答されている点から、宮津地区の方がより敬語上の段階の高い形式を用いる傾向があると思われる（a)。このような違いは、宮津地区と日置地区における尊敬語「（ラ）レル」と「ナル」の形式の選択とそれぞれの形式と丁寧語との結びつきに相違点が見られることが関連しているが、地域差については、4.3 節で詳細に述べることにする。

次に、調査結果の（b)、(c)、(d）で分かるように、敬語上の段階の高い「3. 尊敬語＋

丁寧語」と「2. 尊敬語のみ」の形式の使用は、話者と対者の性別に関係なく、＜ウチ・上＞と＜ソト・上/同＞に使用されるのに対し、最も敬語上の段階の低い「0. 尊敬語・丁寧語なし」の形式は、主に＜ウチ・同・男女＞と＜ウチ・下・男＞に使用される。一方、＜ウチ/ソト＞に関係なく＜下・女＞である場合と＜ソト・下・男＞である場合、形式の選択には個人差が見られる。つまり、段階の高い形式（3、2 形式）を用いるか、あるいは段階の低い（0 形式）を用いるかには、＜上同下＞という年齢が一次的な要因として最も大きく影響しているが、対者が＜上＞と＜同＞である場合は、＜ウチ/ソト＞が、対者が＜下＞である場合には、＜ウチ/ソト＞と＜性別＞による使い分けがあることをうかがわせる結果であると言える。以下の節では、＜上＞、＜同＞、＜下＞の人物に対する待遇表現形式の使い分けに、＜ウチ/ソト＞と<性別＞という要因がどのように関わっているのかについて述べる。

4.2.1.　対者が＜上＞の人物である場合

まず、対者が＜上＞の人物である場合、どのような要因が待遇表現形式の使い分けに関わっているのかに注目してみよう。＜上＞の人物には、対者の＜性別＞による使い分けは認められないものの、＜ウチ/ソト＞という要因が、待遇表現形式の使い分けに関わっていることが確認できた。表 5 は、＜上＞の人物に＜ウチ/ソト＞による使い分けがが見られたインフォーマントを左から並べ、それぞれの質問項目ごとに、対者人物を女性、男性の順で上から並べたものである。表 5 を見てみよう。

表 5　＜上＞である場合の使い分け [2)]。

	MEM	MFM	MGF	HFM	HIF	HEM	HJF	MCF	HCM	HHF	MIM	HGF
A.ソト・上・女	●	●	●	△	▲	●	▲	●	●	●	●	−
B.ソト・上・女	●	●	●	△	▲	●	▲	●	●	×	●	−
C.ソト・上・女	×	●	▲	△	▲	●	▲	●	▲	−	●	−
A.ソト・上・男	●	●	●	△	▲	●	▲	●	●	●	●	−
B.ソト・上・男	●	●	▲	△	▲	●	▲	●	●	×	●	−
C.ソト・上・男	●	●	▲	△	×	●	▲	●	●	−	●	−
A.ウチ・上・女	▲	▲	○	○	×	●	×	●	▲	▲	-	▲
B.ウチ・上・女	○	○	○	○	○	●	▲	×	▲	○	-	○
C.ウチ・上・女	▲	▲	▲	△	○	●	▲	●	▲	▲	-	▲
A.ウチ・上・男	▲	▲	●	○	×	△	▲	●	−	×	-	▲
B.ウチ・上・男	▲	●	●	○	○	●	▲	●	−	×	-	▲
C.ウチ・上・男	▲	●	▲	△	○	●	▲	×	−	●	-	▲

●：尊敬語＋丁寧語、▲：尊敬語のみ、△：丁寧語のみ、○:尊敬語・丁寧語なし、
×：意図どおりの回答が得られなかった項目、ー:未調査

表 5 の右側の HCM、HHF、MIM、HGF の場合、未調査や回答が得られなかった項目が多いため、調査結果が明確ではない。しかし、左側の MEM、MFM、MGF、HFM、HIF の回答を見てみると、＜ソト＞の人物に対しては使用が見られない「0. 尊敬語・丁寧語なし」の形式が＜ウチ＞の人物には用いられていることが確認できる。一方、HEM、HJF、MCF のように、＜ウチ/ソト＞による使い分けは観察されず、主に一つの形式を用いて＜上＞の

2)　表内の横の二重線は、それぞれの節で取り上げる使い分けに関与する対者の属性を区切ったものである。縦の二重線は、使い分けの有無や種類によって区切ったものである（表 5、6、7）。

人物を待遇しているインフォーマントも観察される。

以上のように、対者が＜上＞の人物である場合、待遇表現形式の使い分けに＜性別＞という要因は関わっていないものの、＜ウチ/ソト＞という要因が関わっており、敬語上の段階の高い形式は、＜ソト＞の人物に用いられるのに対し、段階の低い形式の使用が＜ウチ＞の人物に用いられることが確認できる。

4.2.2.　対者が＜同＞の人物である場合

次に、対者が＜同＞である場合に注目してみよう。表 4 で、＜ソト・同＞の人物は、アの部分に偏っており、＜ウチ・同＞の人物はウの部分に偏っていることからも分かるように、対者が＜同＞である場合、待遇表現形式の使い分けには＜ウチ/ソト＞が大きく関連する。＜ウチ/ソト＞による使い分けは、対者が＜同＞である場合、最も多くのインフォーマントに表れる。まず、表 6 を見てみよう。表 6 は、＜同＞の人物に対して＜ウチ/ソト＞による使い分けが顕著に見られたインフォーマントを左から並べ、それぞれの質問項目ごとに、対者人物を＜ソト/ウチ＞、＜女性/男性＞の順で上から並べたものである。

表 6　＜同＞である場合の使い分け

	MFM	MCF	MGF	MEM	HFM	HIF	HEM	HJF	HHF	HCM	HGF	MIM
A.ソト・同・女	●	●	●	▲	△	▲	●	▲	●	●	－	-
B.ソト・同・女	●	●	▲	▲	△	●	●	▲	×	▲	－	-
C.ソト・同・女	●	●	●	▲	△	×	●	▲	－	▲	－	-
A.ソト・同・男	●	●	●	●	△	▲	●	▲	×	－	－	-
B.ソト・同・男	●	●	●	▲	△	▲	●	▲	×	－	－	-
C.ソト・同・男	●	●	●	▲	△	×	●	▲	－	－	－	-
A.ウチ・同・女	○	○	○	－	○	×	△	○	×	－	○	-
B.ウチ・同・女	○	○	○	－	○	○	●	○	○	－	○	-
C.ウチ・同・女	○	○	○	○	△	○	△	○	○	－	▲	-
A.ウチ・同・男	○	○	○	×	○	×	△	▲	×	－	○	-
B.ウチ・同・男	○	○	○	○	○	○	●	▲	○	－	○	-
C.ウチ・同・男	○	○	○	○	○	○	△	▲	○	－	▲	-

●：尊敬語＋丁寧語、▲：尊敬語のみ、△：丁寧語のみ、○:尊敬語・丁寧語なし、
×：意図どおりの回答が得られなかった項目、－：未調査

それぞれのインフォーマントの回答を見てみると、MFM、MCF、MGF、MEM の場合、＜ウチ/ソト＞で用いる表現形式が異なっており、＜ウチ＞の人物に比べ、＜ソト＞の人物に対してより敬語上の高い表現形式を用いていることが分かる。また、HFM の場合、＜ソト・下・男＞を除いて、全ての＜ソト＞の人物に対しては「1. 丁寧語のみ」を用いるが、＜ウチ＞の人物に対しては、基本的に「0. 尊敬語＋丁寧語なし」の形式を用いている。HIF の場合、回答が得られなかった項目があるものの、＜ソト＞の人物に敬語上の段階が高い形式が用いられていることが分かる。HEM の場合、質問項目（B）では、使い分けが見られないものの、その他の質問項目では＜ウチ/ソト＞による使い分けが見られる。HJF の場合、すべての＜ソト＞の人物に対して、「2. 尊敬語のみ」の形式を用いており、＜ウチ＞の人物の場合、＜女＞のみに「2. 尊敬語のみ」を用いていることから対者が＜ウチ＞である場合、＜性別＞が使い分けに影響していることが分かる。HHF、HCM、HGF、MIM の場合、未調査や回答が得られなかった項目が多いため、明確ではないが、HHF、HCM、

HGF、MIM を除いては、対者が＜同＞である場合、＜ウチ＞に比べ＜ソト＞に対して敬語上の段階の高い表現形式が用いられていることが確認できる。

以上のように、＜同>の人物には、＜ウチ/ソト＞を基準とした待遇表現形式の使い分けが顕著に見られることから、＜ウチ/ソト＞という要因が待遇表現形式の使い分けに一次的な要因として関わっており、＜ソト＞の人物に敬語上の段階の高い表現形式を用いると言える。また、対者が＜ウチ＞の人物である場合、＜性別＞によって表現形式を使い分けている話者も観察されることから(HJF)、＜性別＞は二次的な要因として待遇表現形式の使い分けに関わっている可能性がうかがえる結果が得られたと言える。

4.2.3.　対者が＜下＞の人物である場合

最後に、回答に個人差が大きく、対者の＜性別＞あるいは＜ウチ/ソト＞による使い分けが見られた＜下＞の人物に焦点を当ててみよう。表 7 は、それぞれの質問項目ごとに、対者人物を＜ソト/ウチ＞、＜女性/男性＞の順で上から並べたものであり、＜ウチ/ソト＞による使い分けが見られた話者、＜性別＞による使い分けが観察された話者、使い分けが見られない話者、調査結果が明確ではない話者の順で左から並べたものである。

表 7　＜下＞である場合の使い分け

	ウチ/ソト			性別			無			不明確		
	MEM	MGF	HEM	HFM	MFM	MIM	HIF	MCF	HJF	HGF	HHF	HCM
A.ソト・下・女	▲	●	▲	△	▲	▲	▲	▲	▲	－	×	－
B.ソト・下・女	▲	▲	○	△	●	●	○	○	▲	－	×	－
C.ソト・下・女	▲	○	○	△	●	●	○	○	▲	－	×	－
A.ソト・下・男	▲	▲	▲	○	○	▲	▲	○	▲	－	●	－
B.ソト・下・男	▲	▲	○	○	○	▲	○	○	▲	－	×	－
C.ソト・下・男	▲	○	○	○	○	●	○	○	×	－	×	－
A.ウチ・下・女	○	○	△	○	●	▲	▲	○	▲	○	×	○
B.ウチ・下・女	○	▲	○	○	●	●	○	○	▲	○	○	○
C.ウチ・下・女	○	○	△	○	●	●	○	○	▲	▲	○	○
A.ウチ・下・男	○	○	△	○	▲	○	▲	○	▲	×	×	－
B.ウチ・下・男	○	▲	○	○	○	○	○	○	▲	▲	○	－
C.ウチ・下・男	○	○	△	○	○	▲	○	○	▲	▲	○	－

●：尊敬語＋丁寧語、▲：尊敬語のみ、△：丁寧語のみ、○:尊敬語・丁寧語なし、
×：意図どおりの回答が得られなかった項目、－:未調査

表 7 の右側の HGF、HHF、HCM の場合、未調査や回答が得られなかった項目が多いため明確ではないが、＜ウチ/ソト＞による使い分けは MEM、MGF、HEM に観察され、対者の＜性別＞による使い分けは、HFM、MFM、MIM に観察される。一方、HIF、MCF、HJF のように＜下＞の人物には、使い分けが見られない話者も観察される。

まず、＜ウチ/ソト＞による使い分けが見られた話者を見てみると、MEM の場合、すべての質問項目において、＜ウチ/ソト＞による使い分けが見られ、＜ソト＞の人物に敬語上の段階の高い形式を用いていることが分かる。MGF の場合、質問項目（A）において＜ウチ/ソト＞による使い分けが観察されるが、MEM と同様に、＜ソト＞の人物に敬語上の段階の高い形式を用いている。HEM の場合も質問項目（A）において＜ソト＞の人物に敬語上の段階の高い形式を用いて待遇しているが、質問項目（C）の回答を見てみるとその逆

である。4.2.2 節で述べたように、HEM は、対者が＜同＞である場合も、質問項目によって揺れが見られている。しかし、対者人物が＜下＞である場合、使い分けにより大きな揺れが見られると言える。このように、＜下＞の人物に対して、＜ウチ/ソト＞による使い分けが明確に見られる話者もいれば、MGF と HEM のように使い分けに揺れが観察される場合もある。

一方、HFM のように＜ウチ/ソト＞と＜性別＞が複合的に待遇表現形式の使い分けに関わっている場合もある。HFM の回答を見てみると、＜ウチ/ソト＞関係なく、＜男＞には「0. 尊敬語・丁寧語なし」を用いているが、対者が＜女＞である場合、＜ソト＞には、「1. 丁寧語のみ」を用いてより敬語上の段階の高い形式を用いていることが分かる。つまり、対者が＜女＞である場合は、＜ウチ/ソト＞によって待遇表現形式を使い分けており、＜女＞により高い表現形式を用いているということであるが、＜性別＞による使い分けが観察された MFM、MIM の回答を見てみると、＜男＞に比べ、＜女＞に敬語上の段階の高い表現形式を用いていることが分かる。対者が＜下＞である場合、＜性別＞による使い分けが見られたインフォーマントは男性に限られていることも確認できるが、対者が＜同＞である場合、＜性別＞による使い分けが観察された HJF の場合、＜ウチ・同・女＞に対しては、敬語上の段階の低い「0. 尊敬語・丁寧語なし」の形式を用いているのに対し、他のすべての対者に対して「2. 尊敬語のみ」の形式を用いている（4.2.2 節）。MIM の場合、＜ウチ/ソト＞や＜上/下＞に関係なく、女性に対しては、「0. 尊敬語・丁寧語なし」の形式は用いておらず、MFM、HFM の場合、＜下・女＞に比べ＜下・男＞に対しては、敬語上の段階の低い形式を用いている。＜性別＞による使い分けが見られるインフォーマントに共通する点は、男性も女性も同性の相手には敬語上の段階の低い表現形式を用いているのに対し、異性にはより高い待遇表現形式を用いる点である。調査規模や項目また対者設定が異なるため単純に比較することは難しいが、国立国語研究所（1990）でも異性に対してより高い待遇表現形式が用いられていることが指摘されている。しかし、本調査では、対者が＜下＞の人物である場合に対者の＜性別＞が待遇表現形式の使い分けに関わることが多く、＜下＞の異性により敬語上の段階の高い形式を用いているのは男性の話者に限られている結果が得られている。

以上のように、対者が＜下＞である場合、＜ウチ/ソト＞あるいは＜性別＞という要因が使い分けに関わっている。しかし、どちらの要因がより大きく関わっているのかは明確ではなく、対者の＜性別＞による使い分けは、話者の＜性別＞との関連性もあり、＜下＞の人物に対する待遇表現形式の使い分けには個別性が目立つ。つまり、対者が＜上・同＞である場合とは異なって、対者が＜下＞である場合は、規範的な使い分けは観察されず、話者によって他地域からの初対面であることに気を遣うか、あるいは、対者の＜性別＞に気を遣うかが異なっているということである。その結果、対者が＜下＞である場合、待遇表現形式の使い分けに個別性が見られるのではないかと考えられる。

4.3. 尊敬語の使い分けと地域差

前節では、待遇表現形式の使い分けについて述べたが、4.2 節で簡略に述べたように、宮

津地区の場合、インフォーマントの全員から「3. 尊敬語＋丁寧語」の形式が回答されているが、日置地区の場合、「2. 尊敬語のみ」の形式が多く回答されており、敬語上の段階の高い形式は宮津地区に偏っている。このような結果は、「（ラ）レル」と「ナル」形式の選択と関連しているように思われるが、宮津の素材待遇形式を分析した酒井（2015）によると、宮津で用いられる敬語形式の待遇値は「（ラ）レル」＞「オイデル」＞「テヤ」＞「ナル」の順で高い。本調査のそれぞれの項目で回答された尊敬語には、「（ラ）レル」、「ナル」形式と質問項目（A）と（C）においては語彙的な尊敬語「ミエル」、「オイデル」の使用が観察されたが、酒井（2015）を参考に待遇値の高い形式が多く回答されたインフォーマントを宮津地区と日置地区の順で左から並べ、待遇値が高い形式が多く回答された順で上から並べると表 8 のようになる。表 8 のカ、キ、クは、調査結果を言及しやすくするために筆者が付けたものであるが、カは、3 人以上のインフォーマントから「ラレル」が回答されている部分であり、キは、2 人以下のインフォーマントから「ラレル」が回答されている部分である。クは、「ラレル」の回答が見られない部分である。

表 8　尊敬語の運用

		宮津地区					日置地区						
		MFM	MCF	MGF	MIM	MEM	HEM	HCM	HIF	HHF	HJF	HGF	HFM
カ	B.ソト・上・女	★	★	★	★	☀	★	★	☀	×	☀	−	Φ
	C.ソト・上・女	★	★	★	★	×	★	★	☀	−	☀	−	Φ
	A.ソト・上・女	★	★	◆	★	☀	★	★	☀	◆	☀	−	Φ
	B.ソト・上・男	★	★	★	★	☀	★	☀	☀	×	☀	−	Φ
	B.ソト・同・女	★	★	★	−	☀	★	☀	★	×	☀	−	Φ
	C.ソト・上・男	★	★	★	★	☀	★	☀	×	−	☀	−	Φ
	B.ソト・同・男	★	★	★	−	☀	★	−	★	×	☀	−	Φ
	C.ウチ・上・女	★	★	★	−	☀	★	☀	Φ	☀	☀	☀	Φ
	C.ソト・同・女	★	★	★	−	☀	★	☀	×	−	☀	−	Φ
	B.ウチ・上・男	★	★	★	−	☀	★	−	Φ	×	☀	☀	Φ
	C.ウチ・上・男	★	×	★	−	☀	★	−	Φ	★	☀	☀	Φ
	A.ソト・同・男	★	★	◆	−	★	★	−	☀	×	☀	−	Φ
	C.ソト・同・男	★	★	★	−	☀	★	−	×	−	☀	−	Φ
	A.ソト・上・男	★	★	◆	◆	☀	★	☀	☀	◆	☀	−	Φ
	A.ソト・同・女	★	★	◆	−	☀	★	☀	☀	◆	☀	−	Φ
	B.ソト・下・女	★	Φ	★	★	☀	Φ	−	×	×	☀	−	Φ
キ	A.ウチ・上・男	★	★	◆	−	☀	Φ	−	×	×	☀	☀	Φ
	A.ウチ・上・女	☀	★	Φ	−	☀	★	☀	×	☀	×	☀	Φ
	C.ソト・下・女	★	Φ	Φ	★	☀	Φ	−	Φ	×	☀	−	Φ
	B.ウチ・下・女	★	Φ	★	☀	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	☀	Φ	Φ
	C.ウチ・下・女	★	Φ	Φ	★	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	☀	☀	Φ
	A.ソト・下・女	☀	☀	◆	☀	☀	★	−	☀	×	☀	−	Φ
	A.ソト・下・男	Φ	Φ	◆	☀	☀	★	−	☀	◆	☀	−	Φ
	B.ソト・下・男	Φ	Φ	★	☀	☀	Φ	−	×	×	☀	−	Φ
	A.ウチ・下・女	★	Φ	Φ	☀	Φ	Φ	Φ	☀	×	☀	Φ	Φ
	B.ウチ・上・女	Φ	×	Φ	−	Φ	★	☀	Φ	Φ	☀	Φ	Φ
	B.ウチ・下・男	Φ	Φ	★	Φ	Φ	Φ	−	Φ	Φ	☀	☀	Φ
ク	A.ウチ・下・男	☀	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	−	☀	×	☀	×	Φ
	C.ウチ・下・男	Φ	Φ	Φ	◆	Φ	Φ	−	Φ	Φ	☀	☀	Φ
	C.ウチ・同・男	Φ	Φ	Φ	−	Φ	Φ	−	Φ	Φ	☀	☀	Φ
	C.ソト・下・男	Φ	Φ	Φ	◆	☀	Φ	−	Φ	×	×	−	Φ
	A.ウチ・同・男	Φ	Φ	Φ	−	×	Φ	−	×	×	☀	Φ	Φ
	A.ウチ・同・女	Φ	Φ	Φ	−	−	Φ	−	×	×	Φ	Φ	Φ
	B.ウチ・同・男	Φ	Φ	Φ	−	Φ	Φ	−	Φ	Φ	☀	Φ	Φ
	C.ウチ・同・女	Φ	Φ	Φ	−	Φ	Φ	−	Φ	Φ	Φ	☀	Φ
	B.ウチ・同・女	Φ	Φ	Φ	−	−	Φ	−	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ

★：（ラ）レル、☀：ナル、◆：ミエル（質問項目A）、オイデル（質問項目C）、
Φ：無標形式、×：意図どおりの回答が得られなかった項目、－未調査

表 8 で分かるように、どのような形式を用いるかには個人差もあり、尊敬語を使い分けておらず、一つの形式のみを用いている話者も観察されるが、表 8 から分かることをまとめると以下の通りである。

e)「(ラ) レル」の使用は宮津地区に偏っているのに対し、「ナル」の使用は日置地区に偏っている。

f)「(ラ) レル」、「ナル」、語彙的な尊敬語の形式は、話者と対者の性別に関係なく、＜ソト・上/同＞と＜ウチ・上＞に使用が偏っている（表 8 のカ)。

g)「(ラ) レル」、「ナル」、語彙的な尊敬語の形式の使用に個人差が大きく見られるのは、＜ウチ/ソト＞関係なく、対者が＜下＞である場合である（表 8 のキ)。

h) 無標形式[3] は、＜ウチ・同＞に使用が偏っており、＜ウチ・同＞に対して「(ラ) レル」の使用は見られない（表 8 のク)。

以上のように、尊敬語の使用を見てみると「(ラ) レル」と「ナル」の使用には地域差が見られ、日置地区では「ナル」形式を用いるインフォーマントが多く、宮津地区ではより待遇値の高い形式「(ラ) レル」を用いるインフォーマントが多い傾向があることをうかがわせる結果が得られた（e)。また、「(ラ) レル」と「ナル」の使い分けには対者の年齢と＜ウチ/ソト＞という要因が関わっているように思われるが（f、g、h)、以下の 4.3.1 節では、地域差について述べ、4.3.2 節と 4.3.3 節では、対者が＜上/同/下＞である場合、「(ラ) レル」と「ナル」にどのような使い分けが見られるかについて述べる。

4.3.1. 尊敬語の選択にみられる地域差

まず、表 8 を参考に、それぞれのインフォーマントが回答した尊敬語のバリエーションをまとめて示すと次のようである。

(1) φ：HFM

(2)「(ラ) レル」: HEM

(3)「(ラ) レル」、「語彙的な尊敬語」: MGF

(4)「ナル」: HJF、HGF

(5)「ナル」、「(ラ) レル」: MCF、HIF、MFM、MEM、HCM

(6)「ナル」、「(ラ) レル」、「語彙的な尊敬語」: HHF、MIM

以上のように、尊敬語を用いていない話者 (1)、「(ラ) レル」と「語彙的な尊敬語」を使い分けている話者 (3)、一つの形式のみを用いており、φと使い分けている話者 (2、4)、「(ラ) レル」と「ナル」両方の形式を用いる話者（5、6）も見られ、尊敬語の使い分けには個人差が大きいことが分かるが、多くの話者が二つ以上の形式を用いており、特に「(ラ) レル」と「ナル」両方の形式を用いている話者が多いことが確認できる。これらの結果を表 3 の待遇表現形式の調査結果に照らし合わせてみると、「ナル＋丁寧語」の使用が見られるのは MEM のみである。このことから、宮津地区で多く回答された尊敬語「(ラ) レル」の場合、丁寧語との結びつきが強く、「3. 尊敬語＋丁寧語」の形式として用いられる傾向が強いが、日置地区で回答が多かった「ナル」の場合、丁寧語との結びつきが弱く、「2. 尊敬語のみ」の形式で用いられる傾向が強いという結果が得られたと言える。つまり、宮津地区では、待遇値の高い「(ラ) レル」が敬語上の段階の高い「3. 尊敬語＋丁寧語」の

3) 「(ラ) レル」、「ナル」、「語彙的な尊敬語」が見られなかった回答。

表現形式で用いられる傾向が強い一方で、日置地区では、待遇値の段階の低い「ナル」が敬語上の段階の低い「2. 尊敬語のみ」の表現形式で用いられる傾向があるということになる。

以上のように、「(ラ) レル」、「ナル」と丁寧語との結びつきの度合いには相違点があり、尊敬語の選択には地域差が見られる。それでは、「(ラ) レル」と「ナル」はどのような対者に対して用いられているのか。以下の節では、「(ラ) レル」と「ナル」両方の形式を用いる話者（5、6）に注目し、対者が＜上/同/下＞である場合、「(ラ) レル」と「ナル」がどのように使い分けられているのかについて述べる。

4.3.2.　対者が＜上/下＞である場合：「(ラ) レル」と「ナル」の使い分け

「(ラ) レル」と「ナル」は、対者が＜上・下＞である場合多く観察されるが、両形式を用いる話者の回答をまとめて示すと次の表 9 のようである。

表 9　尊敬語の使い分け（上/下・ウチ/ソト）

	上				下			
	ソト		ウチ		ソト		ウチ	
	男	女	男	女	男	女	男	女
HHF	◆	◆	★☀	☀	◆	×	Φ	Φ
HCM	☀	★	-	☀	-	-	-	Φ
MCF	★	★	★	★	Φ	☀	Φ	Φ
MIM	★	★	-	-	☀	★☀	Φ◆	★☀
MFM	★	★	★	★☀	Φ	★☀	☀	★
HIF	☀	☀	Φ	Φ	☀	☀	☀	☀
MEM	☀	☀	☀	☀	☀	☀	Φ	Φ

★：(ラ)レル、☀：ナル、◆：ミエル(A)、オイデル(C)
Φ：無標形式、×：意図どおりの回答が得られなかった項目、－未調査

HIF と MEM の場合、「(ラ) レル」の使用は＜ソト・同＞の対者のみに限られているため、表 9 の人物に対する使用は見られないが、その他の話者の回答から＜ウチ/ソト＞の＜上/下＞の人物に対しての「(ラ) レル」と「ナル」の使用を見てみると、次のような特徴があると考えられる。

ⅰ）「(ラ) レル」と「ナル」の使い分けは見られず、両方の形式は＜上＞の人物を待遇するために用いられる（HHF、HCM）。

ⅱ）＜ソト・上＞の人物には「(ラ) レル」形式で待遇し、＜下＞の人物に対しては「ナル」形式が使用される傾向がある（MCF、MIM、MFM）。

ⅲ）＜上/下＞に関係なく、＜ウチ/ソト＞で「ナル」形式の使用不使用によって待遇する（HIF、MEM）。

以上の結果から、「(ラ) レル」と「ナル」の使い分けには個人差があるものの、＜ウチ/ソト＞や＜性別＞よりは、一次的に＜上/下＞という要因が「(ラ) レル」と「ナル」の使い分けに関わっている可能性が高く、明確な使い分けは宮津地区の話者に限られていると言える。

4.3.3.　対者が＜同＞の人物である場合：「（ラ）レル」と「ナル」の使用対象

次に、対者が＜同＞である場合、「（ラ）レル」と「ナル」がどのように用いられているかについて述べる。表 8 からも分かるように、「（ラ）レル」と「ナル」形式で主に待遇される対者は、＜上/下＞の人物であるが、対者が＜ウチ・同＞の人物の場合、「ナル」の使用は見られるものの、「（ラ）レル」の使用は見られない。このことから、「（ラ）レル」と「ナル」形式が用いられる対者の範囲には相違点があると考えられる。次の表 10 は、＜同＞に「（ラ）レル」または「ナル」の使用が見られた話者の回答をまとめて示したものである。

表 10　「（ラ）レル」と「ナル」の使用対象

	宮津地区				日置地区				
	MCF	MGF	MFM	MEM	HEM	HIF	HJF	HHF	HGF
A.ソト・同・女	★	★	★	☀	★	★	☀	×	－
B.ソト・同・女	★	★	★	☀	★	★	☀	×	－
C.ソト・同・女	★	★	★	☀	★	×	☀	－	－
A.ソト・同・男	★	◆	★	★	★	☀	☀	×	－
B.ソト・同・男	★	★	★	☀	★	★	☀	×	－
C.ソト・同・男	★	★	★	☀	★	×	☀	－	－
A.ウチ・同・女	Φ	Φ	Φ	－	Φ	×	Φ	×	Φ
B.ウチ・同・女	Φ	Φ	Φ	－	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ
C.ウチ・同・女	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	☀
A.ウチ・同・男	Φ	Φ	Φ	×	Φ	×	☀	×	Φ
B.ウチ・同・男	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	☀	Φ	Φ
C.ウチ・同・男	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	Φ	☀	Φ	☀

★：(ラ)レル、☀：ナル、◆：ミエル(A)、オイデル(C)、Φ：無標形式、
×：意図どおりの回答が得られなかった項目、－未調査

表 10 から分かるように、「（ラ）レル」は、＜ウチ・同＞の人物には用いられていないのに対し、「ナル」は＜ウチ・同＞の人物にも使用されている（HJF と HGF）。酒井（2015）でも、「ナル」はほぼすべての人物に対して用いられると指摘されていることからも「ナル」は対者の属性に関係なく広く用いられていると思われる。＜ウチ・同＞の人物に「ナル」の回答が得られた HJF と HGF の場合、「ナル」のみの形式を用いる女性の話者であることは注目すべきであるが、今回の調査結果からは「ナル」の使用と話者の＜性別＞との関連性があるかは明確ではない。しかし、＜ウチ・同・女＞の人物のみに対して「ナル」の不使用が見られる HJF の回答から、宮津市では「ナル」の使用不使用による使い分けがあると言えるだろう。

以上のように、「（ラ）レル」と「ナル」は、使用できる対者に相違があり、「（ラ）レル」は丁寧語との結びつきが強く、「ナル」は丁寧語との結びつきが弱い傾向がある。このことから、4.2 節で述べた「3. 尊敬語＋丁寧語」形式を用いる傾向が強い宮津地区と「2. 尊敬語のみ」の形式を用いる傾向が強い日置地区の相違は、それぞれの地区で「（ラ）レル」と「ナル」を選択する傾向の違いから生じたと考えられる。また、本節で述べたように、＜上/下＞による「（ラ）レル」と「ナル」の使い分けは宮津地区の話者に限られている。このことから宮津地区では「（ラ）レル」と「ナル」の使い分けが相対的に明確な傾向があるのに対し、日置地区では、両形式に明確な使い分けは見られず、「ナル」形式がほぼすべて

の人物を待遇する際に用いられ、「ナル」の使用不使用によって対者を待遇する傾向があると考えられる。このように、地理的な要因が尊敬語の選択と使い分けに関わっていると思われるが、これは、方言区画に属する方言である宮津地区と日置地区の特徴が（奥村 1962）、尊敬語の運用の仕方にも表れていると考えられる。

5.　まとめと今後の課題

本稿では、2014 年と 2015 年に京都府宮津市で行った類義語、待遇表現形式、尊敬語の使い分けの調査結果について報告した。本稿で報告した内容をまとめると次のようになる。

表 11　調査結果のまとめ

	「ドコ」と「ドチラ」（4.1節）	待遇表現形式（4.2節）	「（ラ）レル」と「ナル」（4.3節）
話者の属性	使い分けは女性の話者に多く観察される。	＜下＞の人物に、対者の性別による使い分けは男性の話者に観察される。	×
対者の属性	一次的に＜ウチ/ソト＞が関連しており、二次的には＜上/下＞が関わっている。	・基本的に＜上/同/下＞が最も多きく関与している。 ・対者が＜上/同＞である場合、一次的には＜ウチ/ソト＞が関わっており、＜同＞である場合は、二次的に＜性別＞が関わっている。 ・対者が＜下＞である場合は、＜性別＞あるいは＜ウチ/ソト＞が使い分けに関わっている。	・「（ラ）レル」と「ナル」の使い分けには、＜上/下＞が関連している可能性が高い。 ・「（ラ）レル」は、＜ウチ・同＞の人物には用いられない。
地域差	×	「3. 尊敬語+丁寧語」の使用は宮津地区に偏っており、「2. 尊敬語のみ」の使用は日置地区に偏っている。	「（ラ）レル」は丁寧語との結びつきが強く、宮津地区で多く観察される。一方「ナル」は丁寧語との結びつきが弱く、日置地区で多く用いられる。

宮津における類義語と待遇表現形式の使い分けの調査結果は、表 11 のようにまとめられるが、インフォーマントの数や調査文に限りがあるため、明確な結果が得られたとは言いがたい。また、「ナル」と丁寧語との結びつきや「ナル」の使用不使用による使い分けを明らかにするためには、さらなる調査が必要であり、＜地域内の知り合い＞という対者設定を＜親/疎＞という観点からより細かく設定し調査を行う必要があると考えられる。

【参考文献】

奥村三雄（1962）「京都府方言」井上史雄他編（1996）『日本列島方言叢書　近畿方言考 3　滋賀県・京都府』pp.75-120，ゆまに書房.

国立国語研究所（1990）『場面と場面意識』三省堂.

酒井雅史（2015）「宮津における素材待遇形式ナル」『阪大社会言語学研究ノート』13，pp.16-27，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

じゃん　ゆな（大阪大学大学院生）
willyoubehere@gmail.com